

本計画は

### 「オンリーワンのびわ湖を活かした

観光による地域の活性化」を大前提とし、

びわ湖をはじめとした大津市が持つ豊富な地域資源を

観光資源へと進化させ、地域の活性化につなげていくことを

すべての念頭に置いて策定しました。

### ① 計画の目的

大津市として、観光による地域の活性化を積極的に行う理由は大きく2つあります。1つ目は、観光振興によって人口減少に伴う経済の低迷に歯止めをかけることです。2つ目は、市民が大津の魅力を体験し来訪者と交流することを通じて大津の魅力を再確認し、大津市への愛着を深め、誇りに思う状態をつくりだすためです。

このような将来の実現に向けて、大津市民・観光に関わる企業や団体・行政が大津市の目指す観光について同じ方向を向いて、観光を盛り上げることを目的として策定しました。

観光とは様々な人・組織が関わり、また近年の海外からの来訪者の増加など社会情勢の変化に影響を受けやすい分野です。本計画によって、「迷った時の判断基準がすぐに見えること」「各年度ごとの目標(KPI)の進み具合を確認できること」「方針に沿い、状況に応じた最適な手法が取りやすくなること」「PDCA(プラン・ドゥー・チェック・アクト)の手順を確立すること」「各年度の進み具合によって、目標数値を柔軟に見直すこと」をねらいとしています。

### ② 計画の位置付け

本計画は「大津市総合計画基本構想」の基本方針にある「自然、歴史、文化、スポーツを重視し、多くの人が集うまち」、および大津市総合計画実行計画の施策「オンリーワンを活かした国内外からの誘客の推進」といった構想を実現するための計画として位置付けています。

本計画は、大津市の観光計画においての方針が市民や観光に関わる企業・団体にわかりやすく伝わることを重視しています。非常に目まぐるしく変化する環境に臨機応変に対応するため、本計画においては具体的なアクションプランは定めず、目指すべき理念・重視する数値目標、またそれらを達成するための基本方針を記載しています。

### ③ 計画の対象期間

本計画の対象期間は、平成29年度から平成32年度の4年間とします。

以前の「大津市観光交流基本計画」の期間は8年間でしたが、環境変化に臨機応変に対応をするため4年間としています。また、首長の任期と同じ4年間とする事で全体の政策との連動を図ることも狙っています。さらには、本計画の最終年度である平成32年(2020年)は東京オリンピック開催年であり、観光庁の観光立国推進計画(平成25～28年)においても2020年を目指した目標が設定されており、国の観光政策との整合性も重視しています。

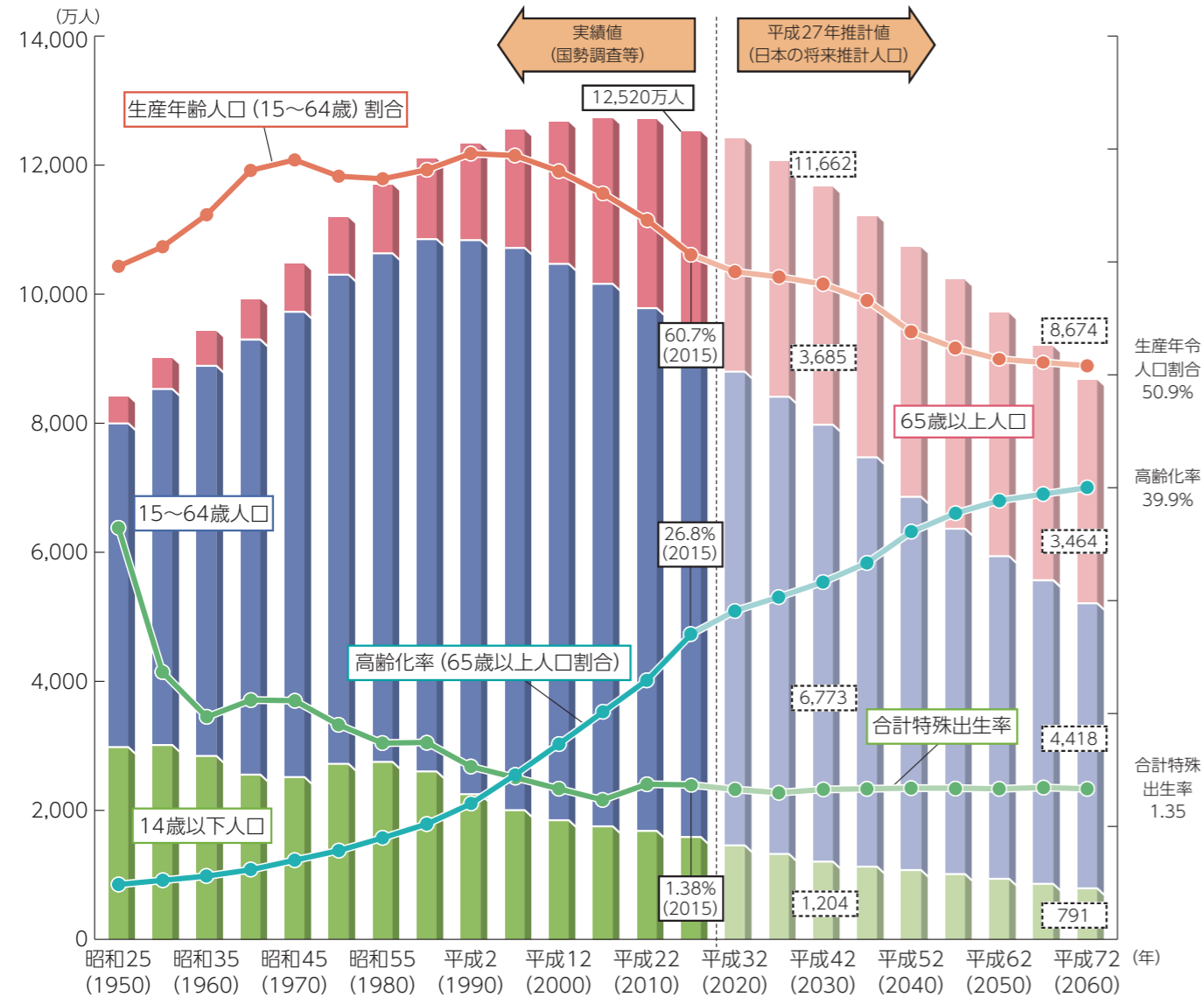
## 2.現状と課題

### ①日本および大津市の観光を取り巻く環境

本計画の策定にあたり将来の日本の観光を取り巻く環境を重視しました。将来、日本の人口は減少すると見られています(※図1)。また大津市も平成32年(2020年)には3,000人・平成72年(2060年)には11万人もの人口が減少すると推測されます(※図2)。一方で、国単位で見ると観光庁が設置され、「観光立国推進計画」が決まりました。さらに各地域での観光による地域活性の動きも目立つようになってきました。将来は、各地域での国内外からの来訪者の呼び込みの競争がより激しくなると考えられています(※図3)。

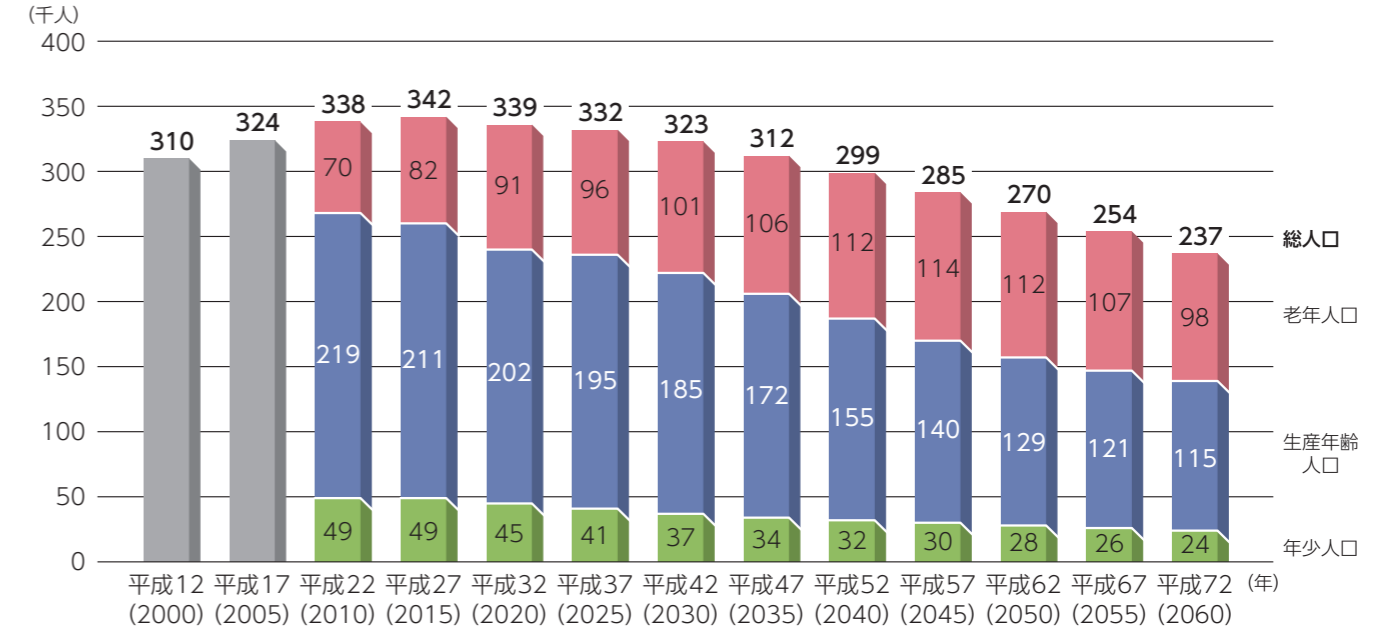
このような環境の中、大津市においても国や他地域と同様に、予想される人口減少に伴う消費活動の低迷を補うべく、観光による交流人口の増加に取り組みます。

図1. 日本人口の現状と見通し：総務省によって発表された日本の人口推移の実績と平成32年(2020年)以降の将来推計人口(国立社会保障・人口問題研究所)を表示しています。将来推計人口とは、全国の将来の出生、死亡及び国際人口移動について仮定を設け、これらに基づいて我が国の将来の人口規模並びに年齢構成等の人口構造の推移について推計したものです。



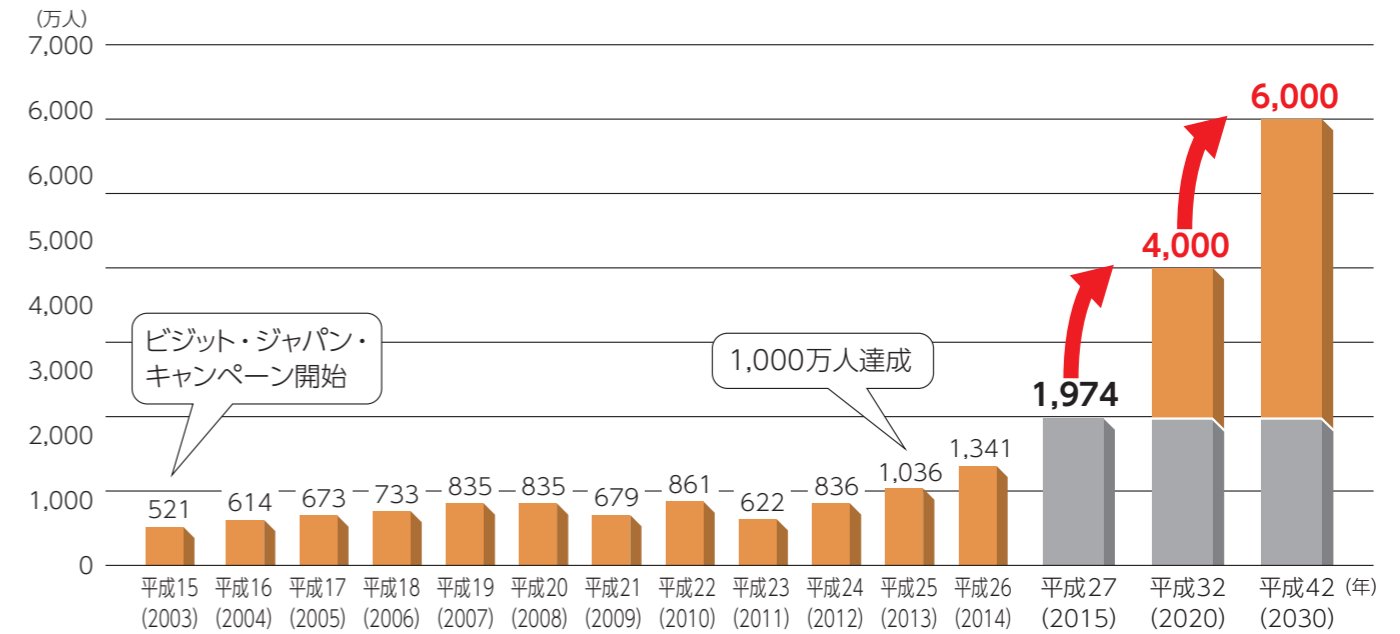
2015年までは総務省「国勢調査」(年齢不詳人口を除く)、2020年以降は国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口(平成24年1月推計)」(出生中位・死亡中位推計)から出典

図2. 大津市の将来人口分析：「年少人口」とは、15歳未満、「生産年齢人口」とは15歳以上65歳未満、「老年人口」とは65歳以上の人口を指します。なお、このグラフは現在の状態が続いた場合の推計です。今後、人口減少に歯止めをかけるよう各種施策を行ってまいります。



大津市 まち・ひと・しごと創生総合戦略から出典

図3. 日本全体の訪日外国人旅行者数の推移：訪日外国人旅行者数の実績は法務省発表の「出入国管理統計年報」より引用。平成32年(2020年)・平成42年(2030年)の目標については「明日の日本を支える観光ビジョン構想会議」(議長・安倍晋三首相)により発表された資料を引用しております。



日本政府観光局 訪日外客数から出典

#### 日本版DMOについて

日本版DMOとは、地域の「稼ぐ力」を引き出すとともに地域への誇りと愛着を醸成する「観光地経営」の視点に立った観光地域づくりの舵取り役として、2015年度より観光庁が推進しています。組織を作ることが目的ではなく、「稼ぐ地域・自走する観光地」となることが目的であるため、大津市としては、まず、行政・観光協会・商工会議所の機能を整理し、足りないものは何か、どこが担うのかを模索し、新たな組織が必要となった場合、日本版DMOの設立を検討します。



## ②大津市の持つ7つの強み

前述のように観光を取り巻く環境は、大津市にとってプラス・マイナスの両面があることから、えらばれる観光地として戦略的に考えていく必要があります。

そのためにはまず、大津市にある多くの魅力や、他の観光地にはない独自性・エリアごとの特色や魅力をまとめ、観光地としての大津市の強みを客観的に捉えていきます。

### 1 びわ湖

びわ湖は「日本一の湖」というだけではなく、様々な面で市民にとってかけがえのない存在であるといえます。生活面では、湖の周囲の山地を源流として日本一の貯水量を誇り京阪神地域の生活用水を蓄えるという機能を果たしており地域住民の生活に無くてはならないものです。また、植物・魚類など豊富な種が生息する環境の基盤となり漁業の発展や豊かな生態系にも貢献をしています。このようなびわ湖の豊かさ・壮大さが現在でも都市生活とも共存し、豊かな落ち着いた気持ちになれる景観を多くの人に提供しています。そして来訪者にとってもその環境は魅力的で、非常に価値を感じられるものであり大津市の持つ最大の「強み」であるといえます。

### 2 京都や大阪からのアクセスの良さ

京都・大阪は国内からの来訪者に人気の観光地であり、海外からの来訪者にとっては東京と併せて「ゴールデンルート」と呼ばれる観光地です。その2都市からのアクセスが良いということは観光地としての長所であるといえます。

### 3 湖の他、山や川など豊かな自然

大津市にはびわ湖だけでなく比叡山、比良山系、瀬田川など周囲に豊かな自然が残っており、特に都会に住む人にとってはゆっくりと過ごすことができる観光地であるといえます。

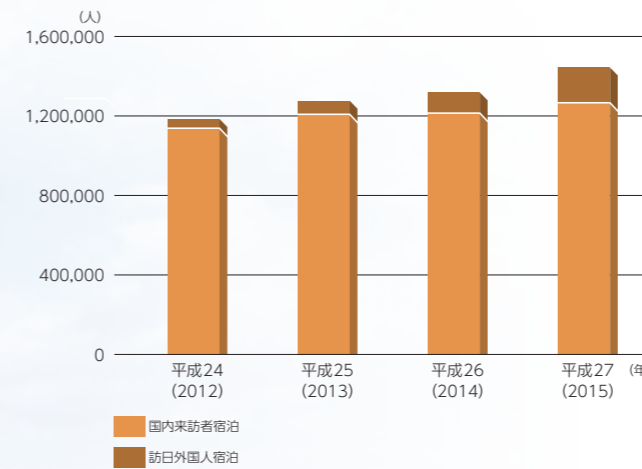
### 4 世界遺産や日本遺産をはじめとした、深い歴史

世界遺産に登録をされている比叡山延暦寺、また日本遺産に登録されている「琵琶湖とその水辺景観」、そして大津市がその昔、日本の都であったことや、国宝・重要文化財などの国指定の文化財が豊富にあることは、歴史に興味の深い来訪者にとって大きな魅力であるといえます。

### 5 宿泊施設が多く、海外からの来訪者を含めた宿泊者数の増加

実際に大津市の魅力が国内外からの来訪者に知られ始めており、大津市に宿泊する人の数が増えてきています。また、それらの来訪者を受け入れる宿泊施設があるということは観光地としての強みといえます。

大津市への入込客数推移：大津市への宿泊を伴う来訪者数(国内からの来訪者・海外からの来訪者)の推移を示しております。



大津市観光入込客統計調査から出典

### 6 泉質の良い温泉

大津市には、おごと温泉、石山・南郷温泉などの温泉があります。おごと温泉は1200年前に比叡山の伝教大師である最澄によって開湯された歴史のある温泉でpH値9.0とアルカリ性で肌をなめらかにする上、身体への刺激も少なく「美肌の湯」と呼ばれ親しまれています。石山・南郷温泉は瀬田の清流に臨む景勝地にある温泉でラジウム含有量が豊富で幅広い効果を持っています。

### 7 四季を通じて楽しめるアクティビティ

大津市には湖をはじめとした自然だけではなく、その自然を活用してのアクティビティが楽しめる施設が多くあります。湖では湖水浴やラフティング、ヨット、ボート、クルージング、ウィンドサーフィン、カヌー、フィッシングなどのウォーターアクティビティが楽しめ、その周囲ではトレッキング、登山、サイクリング、ランニング、ウォーキングができます。また冬にはスキーやスノーボードなどのウィンタースポーツも楽しめます。このようなアクティビティは来訪者の旅の目的や楽しみを増すアイテムとなり得ます。

観光地としての大津市の魅力はあるものの、「大津ならではの」という独自性の視点で強みを磨き上げる必要があります。

### ③大津市の観光地としての課題

大津市が観光地として成長するには、強みを磨き上げていく事と並行して、他の観光地と比較し課題を明らかにする事が大切です。

大津市の観光地としての課題は、複数の調査結果をまとめ、次の5つであると考えています。

1 一人あたりの来訪者の現地小遣いが低い

2 来訪者の大津市での滞在時間が短い

3 観光地としての知名度が低い

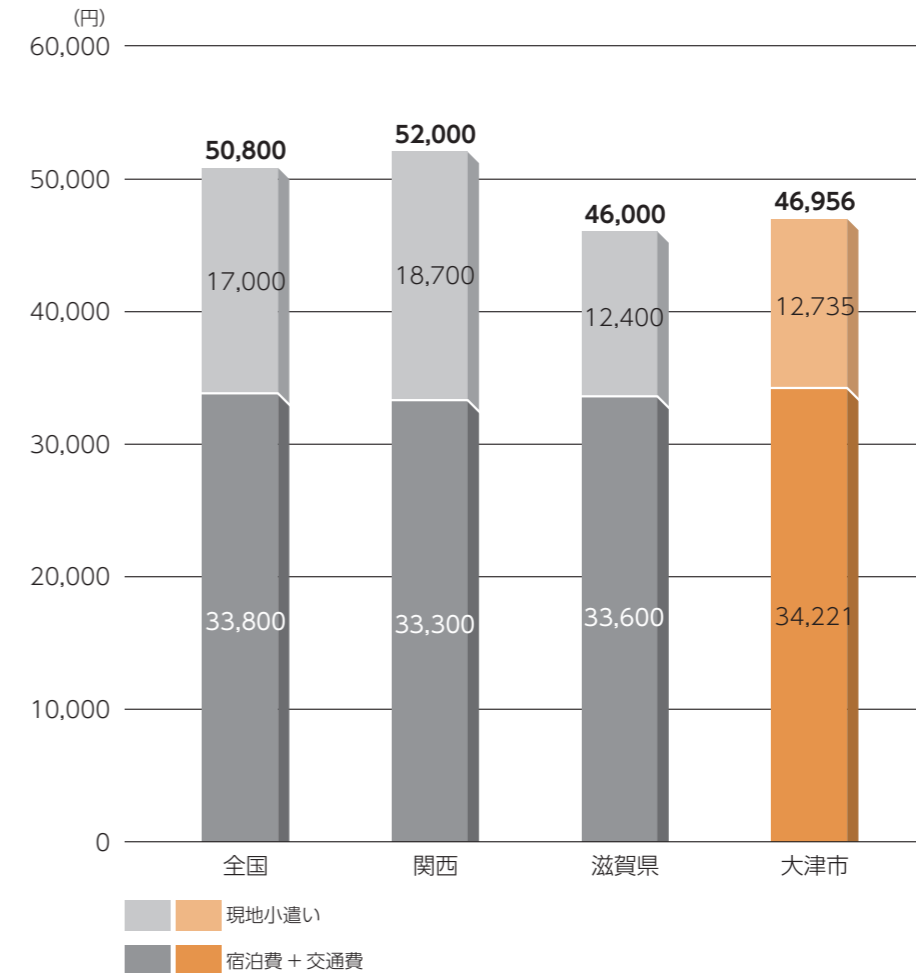
4 市民に大津の魅力をより知ってほしい

5 来訪者の満足度が低い

#### 1 一人あたりの来訪者の現地小遣いが低い

大津市には多くの宿泊施設があり、日帰りの来訪者よりも単価の高い宿泊を伴う来訪者が多く訪れており、一人あたりの来訪者の宿泊費+交通費についても、全国平均を上回っております。一方で、一人あたりの宿泊者の宿泊費以外の現地小遣い(食事やお土産、体験などにかかる費用)については、全国や関西の平均よりも低いことが分かっています。

**宿泊者一人あたりの観光消費額**：宿泊旅行1回あたりにかかった費用(宿泊費・交通費・現地小遣い)を示しております。  
 ※観光消費額は、一人の人が観光をする際に使う金額を指します。交通・宿泊・食事だけでなく現地での買い物やレジャーに使う全ての出費が含まれます。  
 ※金額については、百の位までの四捨五入で示しています。  
 ※旅行費用については、金額の高すぎる回答が平均値に大きな影響を与えることを避けるために、0.5%トリム平均をおこないました。



全国・関西・県のデータはじゃらん宿泊旅行調査2015(インターネット調査)、大津市のデータは平成27年度大津市来訪者満足度調査(聞き取り調査)から出典

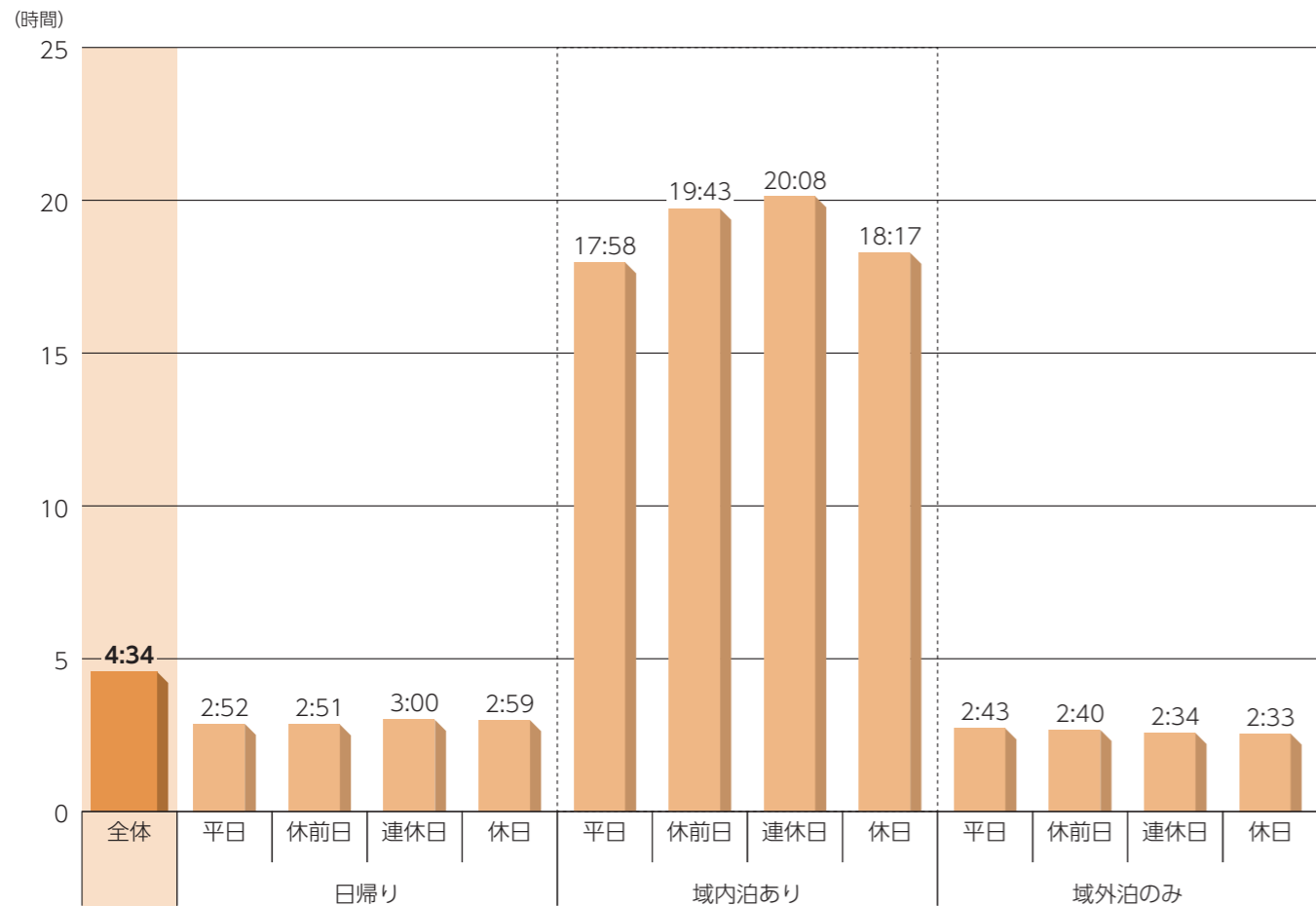
※県の観光消費額は、滋賀県を主に滞在した方の費用総額となります。  
 ※交通費は発地からの交通費も含まれております。

## 2.現状と課題

### 2 来訪者の 大津市での 滞在時間が短い

滞在時間とは、観光で目的地に滞在をしている時間を指します。この時間が長くなればなるほど宿泊・食事・買い物・レジャー・移動などのための観光消費額も増加するため、来訪者に長い時間滞在してもらうことが観光による地域の活性化のためには必要です。大津市内に宿泊している来訪者（域内泊あり）が長時間滞在している一方で、日帰りおよび大津市外に宿泊している来訪者（域外泊のみ）の滞在時間は3時間未満であり、他地域と比べても短い事が分かっています。

来訪者平均滞在時間：大津市への来訪者（日帰り・域内泊・域外泊などの旅程別）の、平日・休前日・連休日・休日別の平均滞在時間を示しております。

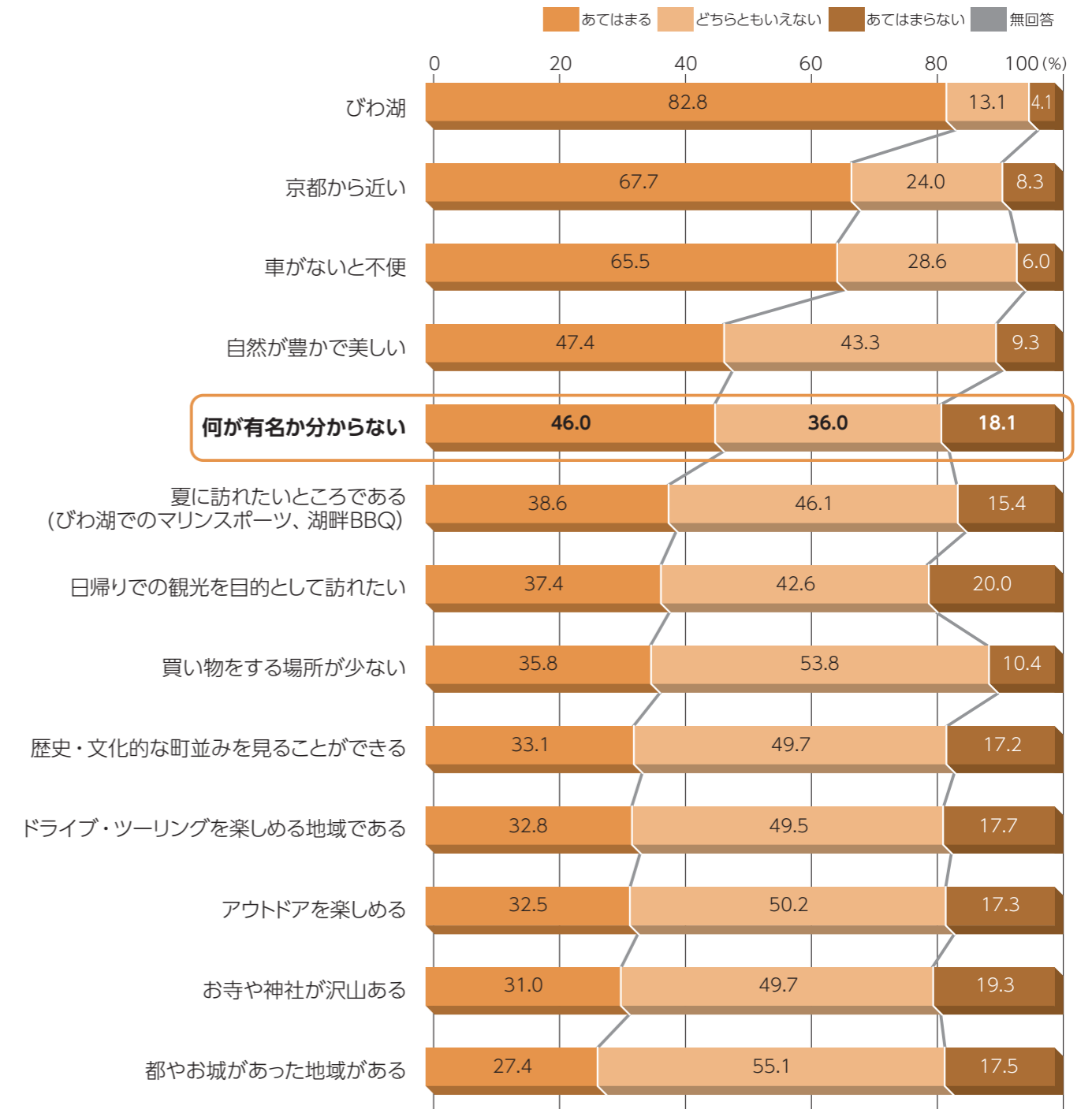


平成26年度大津市観光動態調査(携帯端末位置情報(ビッグデータ)を活用した調査)から出典

### 3 観光地としての 知名度が低い

滋賀県外の方に大津市のイメージを調査したところ、多くの人が「びわ湖」を挙げていましたが。一方で、びわ湖でのマリンスポーツ、豊かな自然、歴史・文化的な街並み、お寺や神社など、観光に関連するイメージを持った方は少ないことがわかりました。また、「何が有名かわからない」と言った回答も多く、大津市はまだ観光地としての認知が高くないといえます。

大津市のイメージ調査結果：滋賀県以外に在住する人に対して大津市のイメージについて聞いたインターネット調査結果を示しております。



平成26年度大津市観光資源発掘調査から出典